

信越化学工業株式会社 2027 年 3 月期第 1 四半期 決算説明電話会議要旨	
日 時	2026 年 7 月 24 日（金） 16：30 - 17：30
開催場所	信越化学工業（株）
会 社 側 出 席 者	・代表取締役社長 齊藤 恭彦 ・取締役兼専務執行役員 半導体事業担当 轟 正彦 ・執行役員 経理関係担当 笠原 俊幸 ・執行役員 広報関係担当 大西 聡 ・広報部長 福井 真二
参考資料	・ 2027 年 3 月期第 1 四半期 決算短信 ・ 業績予想および配当予想に関するお知らせ

* このメモは電話会議でお話した内容をまとめたものです。

【決算概要説明（社長 齊藤恭彦）】

- 2027 年 3 月期第 1 四半期（2026 年 4-6 月）
連結売上高： 6,624 億円（前年同期比 5.4%増）
営 業 利 益： 1,737 億円（前年同期比 4.2%増）
経 常 利 益： 1,921 億円（前年同期比 5.8%増）
当期純利益： 1,308 億円（前年同期比 3.5%増）
- 前年同期比で増収増益の実績を上げることができた。
- 一株当たり利益は対前年同期比 6 %増の 70.39 円。

[セグメント状況]

- 【電子材料】：
 - ・ 電子材料は、AI 関連市場の拡大に牽引された先端分野が引き続き好調。それが他の分野にも波及効果をもたらし、電子材料全般が活況を呈している。
 - ・ 300mmウエハーで作り切れないデバイスが 200mm ウエハーで製造されるという現象も一部で起きている。
 - ・ ウエハーに限らず、当社の手掛ける多くの品目で現行生産能力を上回る供給要請が来ており、必要な投資とそれを支える価格設定に取り組んでいる。
 - ・ 磁性材料は、重希土使用を最小限にする緊急対策を顧客と共に進める一方、複数の原料対策に鋭意取り組んでいる。
- 【生活環境基盤材料】：
 - ・ 北米の塩ビ需要について、今年 4 - 6 月の国内販売数量は業界統計によれば、1 - 3 月

比で 12%の増加、対前年同期比でも 4 %の増加。

- ・ 北米市場にて 4 - 6 月で 3 月に対しポンド当たり 7 セントの値上げが通った。一方、海外市場で年初来通してきた値上げは 5 月後半から巻き戻しを被っている。3 ヶ月前の状況把握に対し、アジア地域で予想を上回る在庫積み増しがあり、その後、需要の減退が起きた。ただ、それ以上に供給側の過剰反応があったと見ている。供給側次第で直せる状況と踏んでいる。実際、先週、中国勢が値上げに転じている。加えて、今週に入り原油価格が顕著に上がっている。
- ・ ソーダ市況は比較的安定している。
- 【機能材料】：
 - ・ 機能品・特殊品を格段に伸ばす方針に変わりなく、そこに集中している。その成果が数字に現れてきている。
- 【加工・商事・技術サービス】：
 - ・ 当セグメントの収益も半導体関連を中心に伸ばしていく。

[今期の業績予想について]

- ・ 今期通年の業績予想を難しくする要因が依然として複数あるが、皆さまの当社事業に関するご理解に資するため、通年の業績予想を以下のとおりとする。
連結売上高：27,000 億円（前期比 4.9%増）
営 業 利 益：7,000 億円（前期比 10.2%増）
経 常 利 益：7,700 億円（前期比 8.7%増）
当期純利益：5,250 億円（前期比 10.7%増）
1 株当たり当期純利益：286 円（前期比 13.2%増）
- ・ 本予想に基づき、通期の配当を 1 株当たり 10 円増配の 116 円と予想。
- ・ この業績予想がアナリストの予想を下回るものであることは認識しており、その差は生活環境基盤材料セグメントで生じていると見ている。市況について慎重な見方をしているが、同セグメントの収益の浮揚に最善を尽くす。加えて、電子材料をはじめとする 3 セグメントの更なる収益伸長に取り組む。

【補足説明（執行役員 経理関係担当 笠原俊幸）】

- 【決算短信 9 ページ】：
 - ・ 業績予想について、1 株当たり純利益 286 円は、2,500 億円の自己株式取得による株数減少を見込んでおり、前期比増加率 13%は、純利益 5,250 億円の 11%増より増加率が大きくなっている。
- 【決算短信 19 ページ】：
 - ・ 投資額と減価償却費の年間予想は期初予想から変更なし。

- 【決算短信 22 ページ】：
 - ・ 業績予想における 7 月以降の想定為替レートは、US ドルは 160 円程度、ユーロは 180 円程度を想定。
- 【為替感応度】：
 - ・ 2027 年 3 月期の経常利益の為替感応度は US ドルで年間 37 億円、ユーロで 2 億円。（円安で益、円高で損。）

【質疑応答】

〈電子材料〉

Q	半導体ウエハーの 1Q の市場動向について
A	(300mm ウエハーについて) ・ 300mm ウエハー市場は、前年同期比で一桁半ばの増加、前四半期比で一桁後半の増加となりました。 ・ ウエハー市場は 6 月頃から急速に需要が回復しており、6 月の 300mm ウエハーの出荷数量は単月として過去最高となりました。この回復の要因は、中東情勢を契機にお客さまの在庫に対する考え方が大きく変化したことに加え、AI 需要の拡大を見据えて、増設を予定しているお客さまがある程度の在庫を確保したいと考えていることもあとと見えています。 (200mm 以下ウエハーについて) ・ 200mm ウエハー市場は、前年同期比、前四半期比ともに 10%台半ばの増加となりました。150mm 以下のウエハー市場は、前年同期比で一桁後半の増加、前四半期比で 10%台半ばの増加となりました。 ・ 200mm 以下ウエハーの出荷が増加した要因は、お客さまのウエハー在庫水準が低下してきたことに加え、民生機器や産業機器向けの需要が回復し始めたことと見えています。
Q	半導体ウエハーの 2Q 以降の見通しについて
A	・ 300mm はウエハーメーカー各社とも現在既にフル稼働の状況であると思われる、今後はウエハーメーカー能力律速の状況になりつつあり、2Q 以降もこの高い水準が続くと見えています。200mm 以下も堅調を見込み、当社は人員的にフル稼働の状況です。
Q	AI 関連の半導体デバイス需要について
A	・ 半導体デバイスメーカーは、AI 需要が相当強く、かつ長期にわたって継続すると考え始めているようです。

	これまでの半導体は、スマートフォンやパソコン、自動車など、台数ベースで市場を把握できました。一方で、AI はインフラ的な要素を持ち、従来とは全く異質なものと考えています。そのため、これまで以上にしっかりとした契約に基づく事業運営が必要です。
Q	ウエハーの長期契約（LTA）の考え方と価格見通しについて
A	（Micron 社と GlobalWafers 社との 10 年契約について） 10 年もの LTA を結ぼうという動きは、お客さま側に AI 需要をベースとして、相当先までデバイスが好調を維持するという見方があることの表れだと受け止めています。 （足元の状況と今後の契約について） 300mm の 1 割弱の数量でウエハー 2 枚使いとなっており、今後さらに拡大していきだろうと当社では見えています。 - 直近の契約は 2020-21 年頃のいわゆるコロナ特需の際に一斉に締結したものであり、コロナ特需が 2022 年の夏をピークに反転した以降は、ウエハー需要は低調でした。そのような背景もあり、各ウエハーメーカーもここに来てかなり慎重に考えていると見えています。 （今後の設備投資について） - 設備投資のコストは大きく上昇しています。建設コストや装置、原材料、輸送、ボックス代など大幅に値上がりしており、これらを十分に考慮した価格設定が必要です。当社としては工場を作るだけでも前回投資時の倍以上のコストがかかると見ており、安易な投資は考えていません。
Q	ウエハー投資額と契約更新の見通しについて
A	（能力増強の投資金額について） - 投資金額が 10 万枚あたり 500 億円程度かというご質問については、直感的にはそれでは足りないと考えています。また、ウエハーの種類や先端対応等により投資コストが大きく異なり、一概に 10 万枚あたりいくらとは申し上げられません。 （契約更新の見通しについて） - LTA の満了時期はお客さまごとにかなり幅があります。早いところでは来年いっぱい満了、またあと 3-4 年必要なお客さまもあります。
Q	半導体ウエハー事業の米国での大型投資の考え方について
A	- Micron 社と GlobalWafers 社との LTA の背景については承知していませんが、GlobalWafers 社が米国で大型投資を行ってきたことや、Buy American の考え方が評価された可能性はあると考えています。 - 当社も米国に工場を有していますが、今後どこでどのように投資を行うかは、

	品質とコストを見極めながら判断していく方針です。現時点では、次の投資先をどこにするかは決めていません。 ・ なお、当社は米国において、既に結晶からポリッシュド、エピタキシャルウエハー製造まで一貫して行っています。
Q	ダミーウエハーやモニターウエハーについて
A	・ デバイスの新規ライン立ち上げ等に使用されるダミーウエハーや、プロセス確認等に使用されるモニターウエハーが不足気味のようです。 ・ ダミーウエハーやモニターウエハーの需要動向は、デバイスメーカーの新規ライン立ち上げにおける重要なポイントとなりますが、しばらくは逼迫した状況が続くと見えています。 ・ グループ会社の三益半導体の再生ウエハーが、モニターウエハーとして使用されていますが、この引き合いが相当増えてきており、フル稼働の状況です。

〈生活環境基盤材料〉

Q	シンテックの2Q（4-6月期）の業績について
A	・ 経常利益は、前四半期（2026年1-3月期）比では増益ですが、前年同期（2025年4-6月期）比では若干の減益です。
Q	通期のシンテックの見通しについて
A	・ （直近の中国勢の値上げや、原油価格の上昇など）足元で価格上昇の兆しはあることを踏まえつつも、下期の収益については慎重に見ています。 ・ 市況は刻一刻変わる局面にあります。価格重視で取り組んで収益をさらに伸ばしていく、実績を上げていくことに取り組んでいる最中です。
Q	北米の塩ビ需要について
A	・ 北米の需要は、夏ダレ（需要減）を注視してきましたが、まあまあ良いところに収まりそうだと見えています。 ・ 住宅市場は決して芳しくありませんが、需要は比較的安定しています。産業投資、データセンター、インフラ全般の投資も堅調ですので、それが下支えになっていると見えています。
Q	塩ビ市況について
A	・ 年初より値上げに取り組み、イラン戦争による原油価格の高騰に合わせて値段の改定を大幅に行ってきました。しかし、その巻き戻しが早くに起きてしまい、また、需要の下振れも予想以上であったために値段が元に戻ってしまった状況です。

- | | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none">・ その後、再度値段の修正を行い、徐々にではありますが、改善がなされています。市況の改善に集中して取り組んでいます。なお、シンテックのコストに大きな変化はありません。 |
|--|---|

*米国子会社シンテックは12月期決算であるため、信越化学の連結決算上、四半期ベースで1四半期の期ズレが生じます。信越化学の第1四半期(2026年4-6月期)には、シンテックの第1四半期(2026年1-3月期)が取り込まれています。